

## 発展型

プレママ体験のプログラムと0歳児の母親の「ホッと一息 ひとりでティータイム」といった企画を同時に組み、プレママがスタッフ、ボランティアと共に子どもを短時間預かり、赤ちゃんの休息を兼ね、お茶を飲みながらゆっくりと過ごしてもらうといった双方にとって有意義な時間となるような工夫もあるとよい。

## 留意点

- ① 初めての場を訪問するには緊張を伴うので、受け入れの態勢には余裕をもち、十分準備をして受け入れていくことが必要。
- ② まず始めにスタッフによる、ひろばの説明や、案内を丁寧におこない、ひろばに入った際には、プレママの参加者とわかるように、エプロンや名札をつけてもらう。プレママ参加者と周囲からわかることで、話しかけてもらうきっかけにもなる。
- ③ すべてのスタッフとボランティアにも紹介しておき、他の母親との話ができる橋渡し役となるように留意する。
- ④ 参加したプレママの近所に、ひろばに通っている先輩親がいれば、了解を取って紹介しておく。困ったときの連絡先に持っているだけでも安心してもらえる。
- ⑤ このプログラムには助産師や保健士の協力が欠かせない。常日頃より良好な関係をつくっておくことが必要。

## (2)助産師さんを囲んでのグループ相談

### 趣旨と目的

出産は多くの期待と不安をもたらすが、とくに初めて出産には不安が伴いやすい。助産師や先輩親の体験談を聞いておくと、

心構えができて安心できることが多い。夫とともに参加できれば、妊婦の安心感にはさらに大きくなる。

プレママ・パパの妊娠中の不安や出産に向けての不安を軽減し、大事にサポートされているという安心感を持って出産を迎え、育児への気持ちの準備をしてもらうことを目的とする。

## 実施方法

### ①対象

妊娠中のプレママとそのパートナーに参加を呼びかける。相談者としての参加だけではなく、他の人の話を聞く等の参加の仕方でも可とする。プログラム(1)の参加者にもあわせて呼びかけていけば効果的である。

先輩親たちもフォローアップをかねて参加してもらい、出産の経験や育児について語ってもらう。

### ②準備

途中にお茶の時間を入れるなどして、つろいだ雰囲気やリラックスできる場面を作る。

③保健師を囲んで、自由に質問したり話を聞いてもらうが、スタッフが堅苦しくない進行役を務める。

先輩親たちが0歳時期の子どもの生活でどの様な事にとまどい、悩んでいるか、また自分の身体ケアなどについて話しあうところに同席するだけで、妊婦にとっては大いに今後の参考になるはずである。また出産に向け、助産師だけでなく、先輩たちからのアドバイスも心強いはげましとなることであろう。

## 留意点

- ① 助産師を囲んでのグループ懇談会は、オープンな形式での相談とし、産前産後の母親の身体健康について、出産に備えての心構え、出産時の様子など、参加者からの質問を中心に助産師に話してもらう。出産へのイ

メージがわいて、夫婦で安心して出産を迎えるように配慮する。

②0歳児の生活、産後すぐの親としての生活についても話題になれば、産後の育児や生活の予想も可能になり参考になる。

③事前に大まかに、相談したい内容を知っておけば、助産師も資料を用意したり、準備をしたりしておくことが出来るので、事前に質問をもらっておくとよい。

スタッフは助産師に任せきるのではなく、事後も助産師とよく連携をとり、親子の見守りを続けていくことが必要である。

### 3)一時預かり・相互預かり

#### (1)一時預かり

ーひろば事業とファミリーサポート事業のドッキングプログラムー

#### 趣旨

ひろば事業の一番の良さはふらっと立ち寄り、自由に集うことが出来、心の安らぎを得られることである。ひろばでは同じ悩みや喜びを共感できる子育て仲間を作り、楽しい子育てに繋げていくことが最大の目的である。ひろば利用者の中にも、一時預かりの希望者は多い。目的は多種多様だが、ちょっとした預かり先がなく困っている人は多い。例えば歯医者や産婦人科等への通院、美容院へ行きたい、買い物に行きたい、ひろば利用の仲間達と食事会へと言うケースもある。民間の託児サービスを利用すると高額の入会金、月会費などと託児料は高額になる。しかも信頼に足りるかどうかが、預け先に不安がある場合もある。

ファミリーサポート事業が各地で実施されるようになり、各自治体においてもだいたい普及してきた。地域によりまだ格差はあるが幼稚園、保育園の送迎だけでなく、在宅育児の預かり等も行われるようになってきた。

しかし、利用者にとっては必ずしも利用しやすいという訳ではなく、ニーズはあっても、事前登録や事前打ち合わせが急な用事の時に間に合わない。援助会員宅での保育にも抵抗がある。またどのような人が預かってくれるのかよくわからないといった様々なハードルがある。そうした一連の課題に対し、本プログラムにおいては、日頃遊び慣れた場所で、顔なじみのサポーターが預かってくれ、安心して託すことが出来る。ひろばのサポーターの中にファミリーサポートの援助会員をおき、依頼があった時は担当者を決め、援助会員が保育に当たるという仕組みである。ひろば利用者も、一緒に見守り遊んでくれるし、子どもにとって

の環境も適している。

以上のような理由から、ひろばの中にファミリーサポート事業を展開することを提案する。ひろば事業に預かり機能を持たせることにより、更なる子育て支援の充実を図ることが出来るのではないか。

#### 実施方法

##### ①対象

ひろば利用者。事前にファミリーサポート利用会員の申し込みをしていることが条件となる。

##### ②進め方

実施のひろばがファミリーサポートの事務局を兼ねていれば進めやすいが、多くは社会福祉協議会などが実施しており、別団体で活動している場合が多いと思える。

まずファミリーサポート援助会員にひろばの存在を知ってもらい、年齢が適合すれば預かっているお子さんと共にひろばに訪れたり、預かっていない時間帯はひろばのボランティアとして参加してもらおう。逆にひろばのボランティアにもファミリーサポートの事業を知ってもらい、研修を受けてもらったり、援助会員として登録してもらおうといった働きかけも必要である。

ひろばスタッフは利用者のニーズを的確にとらえ、援助会員につなげていくようコーディネートが求められる。利用料金や実施報告等は、ファミリーサポート事業の手続きにのっとり、適切に対応する。

##### ③対象児の定員

ひろばの規模にもよるが、同時間内の定数を5名程度とし、原則的に1対1の預かりとする。

##### ④利用時間

原則としてひろば開催時間内とするが、事情によってはこの限りではない。

#### ⑤利用料金

ファミリーサポート事業と同料金が望ましい。

#### ⑥預かる人（援助会員）

基本的にファミリーサポート事業援助会員登録者（自治体等が行う講習会を終了したもの）。できれば広場のサポーターとしても登録してもらおう。

#### ⑦預かる場所

主にひろば利用し、都合によっては戸外に出かけることもある。午睡できる小部屋かコーナーがあればなおよい。

#### ⑧準備するもの

預かる時間や年齢により、ミルク・弁当・おやつ、着替えなど利用者側が必要だと思えるものを用意してもらおう。

#### 留意点

① 預かる際の健康状態やミルク・離乳食の時間等を把握しておく。

② 預かる子どもは誰が預かっているのか一般のひろば利用者も把握できるように名札などで判るようにしておく。

③ ひろばの広さにより同時間内に預かる人数の調整をしないといかないと、ひろばとの両立がこのプログラムのメリットとしては、以下のようなものが考えられる

- ・ファミリーサポート事業の発展。多くの地域でひろば事業とファミリーサポートの事業は乖離しており、サポーターとなる層も重複している場合も多い。そうした場合、研修や育成を別々の場所で行っていくことは非効率的である。
- ・親も子どもも慣れ親しんだひろばで、安心して一時預かりを利用出来る。
- ・児童虐待防止の観点からも一時的な保育は非常に効果的である。
- ・ひろばを通して地域の交流が深まる。

・中高年者のボランティア活動の場となっていく。またそうした広がりでも異世代交流を図ることが出来る。

- ・ひろばにおける就労の機会を生み出す。
- ・そもそもこのプログラム自体が充実したひろばにおいて実施可能なものであるすなわち、基本的にひろばがもつ柔軟性やネットワークの広がり、地域コーディネート力等が求められてくる。預かりの機能を併せ持つて行くことで、ネットワークも広がり、ニーズも見えてくるところがあり、本来の力が高まるといった相乗効果に一番期待がかかるところである。

#### (2)相互預かり

#### 趣旨

子どもを一時的に預けたいというニーズは多い。子どもを一時的に預けることは、親にとって大きなリフレッシュとなる。また、親自身が講座などの学びの場に参加する際、子どもを預かってもらえることで、ゆっくりと自分の学びの時間を持つことができる。

ひろばにおける親の学習プログラムや講座への参加に際して、ちょっと預ける一時預かりがとても大切であるが、自分が預かる側に立つ経験はあまりない。最近では、親同士が預けあうことに気兼ねや心配などの抵抗感を感じる親が少なくない。子どもが幼い場合など、特にそうである。そのため、他の親にちょっと預けたり、自分が他の子を預かったりする機会はあまり多くない。

他の子を預かることでの発見は意外に大きい。特に第1子の親の場合、わが子に手いっぱい他の子どもをじっくり見る機会はあまりない。そのような親が他の子を預かることによって、これまでわが子で心配していたことが、他の子も同じなのだとして理解できて安心するなど、子どもへの理解の仕方が広がる機会となる。また、他の親に預けることから得られ

ることも大きい。他の親に預かってもらうことによって、自分とは違った子どもの見方やかかわり方、子どもの意外な面が発見できるなどがある。また、この預けあう機会を通して、普段はなかなか話せない子どもの気になっている点についての会話がはずんだり、交流が深まることもある。

以上のような意味から、ひろばで親が講座などに参加する機会に、意図的な「相互預かり」を行うことには親同士の育ち合い、支え合いを生み出す大きな意味があると考え、このプログラムを提案する。

## 実施方法

### ①対象

ひろばを利用者で、「相互預かり」がセットの親向けの講座などのプログラムに参加を呼びかけ、希望してきた親子。

### ②進め方

i 参加希望者の中からペアを作る。

ペアの組み方には、2通りが考えられる。プログラムへの参加希望段階から2組がペアになって参加する場合と、参加希望者の中からスタッフが、相互預かりの効果を考えてペアを作る場合である。

ii 自分でペアを作って参加する場合。

顔見知りや安心して預けあえる関係なので、気軽に参加できるというメリットがある。普段は仲がよくても、預け合うまではいかない場合もあるので、より関係が深まるという効果が期待される。

iii スタッフのほうでペアを作る場合。

普段は知らない親子と知り合いになるきっかけとなるなど、新しい出会いやつながりを生み出す効果が期待される。

・同じ年齢や、住んでいるところが近いなどの共通点の多い者同士をペアにすると親しくなりやすいという利点がある。逆に子どもが異年齢のペアを作ることも良い点がある。

・3歳児の親が0歳児を預かることで自分の子どもが0歳の頃を懐かしく思い出すなど、3歳児にとっても赤ちゃんに触

れる良い機会になる。0歳児の親にとっては少しお兄さんお姉さんの子どもに接することで、この先の発達の見通しを持てるようになる。

・それぞれの利点を知った上で、普段の利用者の様子を良く知っているスタッフが良い出会いとなるようにペア作りすることが必要である。

・ひろばの親子の置かれた状況から判断して、ペアで参加してもらうか、スタッフがペアを作るかの2通りの方法を使い分けることが望ましいと考えられる。

具体的な展開として例を挙げる。

### ③活動例1（基本型）

i ひとつのプログラムの参加人数は10組程度。同じプログラムが2回に分けて構成され、ペアのどちらかが前半、もう一方が後半に参加する。参加しない親が、ペアの参加している親の子どもと自分の子どもをひろばで見る。

ii 3～4人のスタッフがサポートに入ることが望ましい。プログラムの時間は40～50分以内が適当。お茶やリラクゼーションなど、親自身が子どもを預け、ゆっくりとした時間を過ごすことのできる内容が良い。

iii 最初と最後にペア同士が話し合う場を持つ。自分の子どもを預かってもらう際に、伝えたいことを伝える。スタッフの担当を決めておき、何かあったらサポートすることを伝えておく。最後には預かっているときの様子などを報告しあう。その場に、担当となったスタッフも同席する。

### ④活動例2（短時間型）

i 短時間の単独で参加するプログラムでの「相互預かり」。例えば15分のハンドマッサージなどに一人ずつ交代で参加する。

ii プログラム1よりも短時間であり、初めて子どもを預ける場合や、親子がまだひろばに来て日が浅い場合、ひろば側で「相互預かり」のサポートに付く人員の

足りない場合などにも実行可能なプログラムである。短時間であるため、親も参加しやすいと予想される。最初と最後の話し合いはプログラム1と同様である。

#### ⑤活動例3（グループ型）

i プログラム1と同様の形態で、ペアに分けずに、5人の親が10人の子どもを見る方法。スタッフが3～4人。この方法には子ども同士、親同士のかかわり合いがあるなど、集団のおもしろさがあるが、このプログラムを行うために、1室区切られた空間が必要となる。

#### 留意点

- ① わが子を預けるのがはじめての親子が多いため、預かる親が負担を感じたり、預けられる子どもに無理がかからないような工夫が大切となる。特に、預かる場所、スタッフの助け、時間などきめ細やかな配慮が必要である。
- ② これまで預け合いを経験していない人が、このプログラムに参加してみようと思うことは、大きな決断である。そのような決断をしたものの、預かった子どもや自分の子どもがずっと泣いたり、怪我をしたり、機嫌が悪くなったりして、悲しく負担の多いものとなることを、できる限り回避する必要がある。
- ③ むしろ、この預け合いを行うことで、子どもを見合うのはおもしろい、楽しみであると受け止めてもらうよう、スタッフの配慮が必要である。プログラムにあるように、5ペアにスタッフが3～4人付くのは、非常に多いと感じられるかもしれないが、それだけ手厚いサポートが必要不可欠なのである。
- ④ 親子の様子を見守り、必要なときには手を貸し、必要のないときには離

れて見守るような熟練したスタッフの存在が必要である。「相互預かり」の後に、スタッフ間でミーティングを持ち研鑽を積むことが、プログラムの質を高めていく上で求められる。

- ⑤ このプログラムは、単に講座の合間に預け合いを行わせることが合理的だという性格のものではない。あくまでも、親同士が預けあうことを通して、自分の子育てに新たな発見をすることや、子育てを共にしていくことの喜びや安心感が得られることが目的である。そのような親同士の支え合いを、その下からサポートするのが、このプログラムを行うひるばスタッフの役割である。

#### 4)親のエンパワーメント

誰かを支援するとは、相手に何かをやってあげることではない。本人自身が力をつけ、自分の力でやっていけるように支援することが求められる。親自身がエンパワーされること、そのために実施できそうなプログラムを2つ提案する。

##### (1)親による自主企画講座

###### 趣旨

基本的に一回完結型の講座で子どもにも参加するプログラムであるが派生的に連続化したり、可能であれば保育付、または相互預かりで対応といった形での発展もありえる。

ただし子育て中の親たちは、子どもの体調や家庭の都合により連続しての受講が困難な場合が多く、途中からの参加を容易にするための配慮が必要。また、自分の興味関心に合わせ、親自身が講座を選択できるようにする。

親子での参加は、子どもを預けることに抵抗がある人でも気軽に参加できると同時に、保育のための費用や人件費が不要であることから、プログラムの実施自体を容易にするものである。

講座の内容によって保育が必要な場合は、参加者である親同士が交代で保育を担当したり、保育ボランティアを募ったりするものとする。

###### 目的

親の子育て力を高めるためには、親自身も子育てにおいて自己充実感を持つことが大切である。子育て中の親が講座に参加することにより、子育てに関する知識や技能を学ぶだけでなく、仲間と交流し、活動する場を得るための機会とすることを目的とする。

専門的な知識や技術を持ちながらも子育てのために第一線を退いている人を講師とすることで、講師自身が社会復帰や再就職を意識する機会にもつながる。企

画運営を親たちが行うが、一人の社会人として地域貢献を果たすことにもなる。

###### 実施方法

###### ①対象

主に子育て中の母親、父親を対象としているが、子育てに興味関心のある人すべてに開かれたものとする。

参加者同士による話し合いを円滑に進めるためには、数名～20名ほどの人数が適当と思われる。

###### ②開催日時

1～2ヶ月に一度、平日の午前中1～2時間を目安に開講する。

###### ③募集

ひろばの利用者を中心に参加者を募る。また、参加を募る案内チラシを、公民館や子育てひろば、小児科、子ども服店等に置かせてもらうなど、利用者が身近な所から情報が得やすいよう配慮する。

ホームページやメールといった情報ツールを使つての周知も有効である。

###### ④必要経費

参加費を徴収する場合は100円～300円程度。参加者に負担がかからない額であること。またこの経費から、当日の資料やお茶を用意する。

###### ⑤講座のテーマ

実際に子育てをしている当事者の視点から子育てを大切にすること。そうすることで参加者にとって興味関心の高い内容となるからである。「子育ての意識や能力を高める」ことのみにとらわれず、「子育て中だから知りたいこと、子育て中でもやりたいこと」を実現するための趣味と学習の講座となるようにする。

###### ⑥展開例

講師による話題提供から、参加者によるグループトークや参加者全体での話し合い、講師によるまとめという流れが考

えられる。講師自身も同じ子育て中の親であることから、参加者が気軽に意見や質問を出しやすい雰囲気で行うことが望ましい。

具体的なテーマとして「子育ての悩みを語ろう」「幼稚園・保育園入園準備」「おじいちゃんおばあちゃんとの付き合い講座」「アトピー、喘息どうしてる?」「子どもと作るおなべのケーキ」等が例として挙げられる。

#### 留意点

- ① 基本的には、参加者である親たちが講座を組み立てるが、コーディネーターはスタッフが行うことが望ましい。企画や周知のための広報活動、講師の手配や当日の準備を親たちが分担して行えるようなコーディネーターが必要となる。
- ② 講座自体は親同士の学びあいが基本であるが、専門的な見解を持つスーパーバイザーとして関われるスタッフの存在が必要と考える。
- ③ 場合によっては、参加者へのアンケート調査を行い、実施して欲しい講座のニーズや、講座の感想を常に把握することも必要となる。
- ④ 企画や講師については、特定の宗教や政治団体との関係性のないもので非営利であることに留意しながらコーディネーターをするよう心がける。

#### (2)グループワーク

－「ノーバディズ・パーフェクト」を応用して－

カナダの「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」は親の子育て力を高める優れたプログラムである。しかし、それをそのままに行うことは、場所やスタッフ、時間の確保、親が6回なり8回な

り連続して参加することなどにより、実施が難しいのが現実である。

応用編として、簡略化したプログラムを提案する。参考資料として『ノーバディズ・パーフェクト・シリーズ』と『父親』を準備、必要に応じてテーマに沿った資料や情報を揃えて提示すると、学びの参考になる。

#### 目的

日ごろ気になっていること、困っていること、考えてみたいこと、人と話し合ってみてみたいこと、疑問に思っていること等々、人はいろいろな悩みや課題を抱えて生活をしている。

子育てひろばなどで、親に関心やニーズのありそうなテーマを設定し、そのテーマに集まった親のグループで話しあいを行う。悩みを話し、聞いてもらって気持ちの整理をする、また人の話からいろいろな知恵やアイデアをもらい、自分の課題解決に参考となるヒントを得てもらうことを目的とする。

#### 実施方法

##### ①テーマの設定

子どもとのかかわり方で「反抗期の子どもと向きあい方」「上手なしかり方ってあるの?」「食事について」など。家庭内の人間関係で「子どもと気持ちが通じあうコミュニケーション」「お兄ちゃんお姉ちゃんとの向きあい方」「パートナーとのコミュニケーション」「おじいちゃん・おばあちゃんとの関係」など。親自身について「お父さんの子育て」「私ってどんな人?」など、親の関心が高そうなテーマとする。

##### ②時間と回数

1回の時間を1時間半から2時間とする。1テーマについて同じメンバーで話しあいを続け、変化しながら気づきを得ていくために、連続3～4回のシリーズとする。



### ③人数と募集

テーマと開催の回数とその日時を示して、参加者を募集する。8人程度、3～4回のシリーズに出席できる人が望ましい。

### ④託児とその担当者

親同士がゆっくり話すために託児を行う。親から子どもの状態、希望することを記入してもらい、できれば1対1に近い担当者をつける。受け渡しは丁寧に行い、終了後には託児中の子どもの様子を伝える。連続講座なので、回ごとに同じ子どもに同じ担当者がつくことが望ましい。地域のボランティアにも協力を依頼して託児の担当者を確保しておくといよい。

### セッションの進め方

セッションを担当するファシリテーターが進行を務め、次のように進める。

#### ①アイスブレイカー

初めに、互いに知りあい緊張をほぐすために、自己紹介を兼ねて「私の好きな～」「私を～に例えたら」など、「私」をテーマにした簡単なコメントをそれぞれにしてもらおう。初めて会うもの同士でも、声を出すことによって、その後の参加や発言がしやすくなる効果が期待できる。

#### ②決まりごと

セッションに安心して参加できるように約束事を決めておく。まずはここで出た話はここだけのこととしよう、と安全な場を提案して参加者の了解を取る。

そのほか参加者が不安に思っていること、みんなに頼んでおきたいことなどを出してもらおう。出された項目はみんなの合意事項として大きな紙に書いて張り出しておく。次回以降にも張り出して、追加項目が出れば書き足していく。

#### ③テーマの展開

最も時間を使う、中心となる活動である。決めてあったテーマについて、思っていること、困っていることを、話した

い人から自由に話してもらおう。順番や、指名によって話してもらうことは避けて、話したそうな人が自発的に話すのを待つようにする。

話し合いだけでなく、テーマについて考える機会を提供する、たとえば出てきた話の場面をロールプレイで演じてみる、実際の子育て場面を検証する項目を考える、考えの似たもの同士が小グループになって話しあい、元のグループに戻って発表するなど、さまざまな活動を入れると、互いの気づきや学びを深めることができる。

話が行き詰ったとき、判断に迷うときなどに、「ノーバディス・パーフェクト」のテキストを開くと、子育てのヒントや話し合いの新しい展開を得ることができる。合間にお茶の時間を入れると、ほっとした雰囲気を作ることもできる。

#### ④要約とふりかえり

ファシリテーターは話し合われたことや活動を要約して伝える。出てきた話から、何をとりかはそのぞれ参加者の判断に任せるために、結論は出さない。

参加者に、セッションに参加して感じたこと、ヒントになったことなどを発言してもらおう。あまり発言のなかった人にも興味のあるようなことで話せる機会を作るようにする。家に帰って実行してみたいことについても話してもらおう。

#### ⑤フォローアップ

二ヶ月後に電話を入れるなどして様子を聞き、必要に応じて対応する。

### 留意点

- ① この懇談に参加して、なんとなく分かった、よかったとするのではなく、何を感じ何を得たのかを、最後に言語化することで自覚してもらおうことが大事である。その上で、実行してみたいことも自分が表明することで、実行することにつながりやすくなる。

② 結果から何を取り、何をするかについては個人が選ぶことであって、発言においても強制しないことが必要である。

③ ファシリテーターは参加者に付き添う人であり、参加者を中心に据えて指導的にならないよう、気をつける必要がある。

参加者が話しやすい雰囲気をつくり、一人ひとりの話をよく聴くことが大切である。耳で聞くだけでなく目でもからだでも、こころでも聴く姿勢が求められる。

④ 聴くことが中心ではあるが、合間に自分の経験が役に立つと思われるときには、話しても構わない。ヒントや情報を提供するとしても、結論や答えをだすことは控える。

⑤ ファシリテーターは、自分自身のあり方が問われる立場であることを自覚して、つねに研鑽を積むことが求められる。

## 5) 父親支援プログラム

### (1) イントロダクション

ー父親支援プログラムが有効に機能するためにー

父親支援の最大の目的は、父親が子育てする主体としての新たな役割モデルが形成されることである。ただ、提案するようなプログラムを単に行うだけでは難しいというのが、今年度の実践を通して実感したことである。

それは、昨年度の支援者向けアンケート調査からもわかったように、プログラムを実行しようにも、父親はなかなか参加しにくいという現実がある。これは、今年度のひろばでの実践報告からも明らかであった。また、昨年度の親向けのアンケート調査からも、多くの母親が、「夫はそれなりに子育てに協力的」だと考えているが、それはあくまでも「母親が子育ての主体」で、父親はその「協力者」でしかないことを意味している。これは、旧来の「父親モデル」である。

この背後には、親世代の育てられてきた「父親モデル」のリサイクルシステムがあるとともに、子育ての主体者となれない社会システム（つまり、子育てに関与する時間、あるいは働き方）の問題がある。このようなシステムを乗り越えるための仕掛けが具現化しなければ、様々なプログラムも効力を十分には発揮し得ないことは自明である。

そこで、父親支援プログラムを有効に機能させるための前提条件として、父親が出産と子育てにかかわれるような社会的なシステム形成が必要であると考え、それを実現するための具体案を2つ、以下にあげる。

#### ①「育児休暇」の一般化

昨年度のカナダの子ども家庭支援の実態からの父親支援への提言からもわかるように、父親の新たな役割モデルを再構築し、育児の主体者となるためには、周産期からのかかわりへのサポートが必要となる。そ

のプログラムは1)のプレママ・パパ、マタニティプログラムでその実際が提案されているが、そのようなプログラムに参加するなど、夫婦一緒に出産にかかわる必要がある。母親が「親」になるのと同様に、「うんちの世話」「泣き続ける赤ちゃんをあやす」等に成功するなど、周産期から父親が子育てにかかわれる時間が保障されなければならない。

そのためには、出産前後の育児休暇取得が、一般化されなければならない。また、出産前後のみならず、特に乳幼児期の子どもをもつ親が、必要に応じて育児休暇をとることが当然の権利として保障され、それが職場からの不利益を絶対に被らないような制度作りが必要である。

#### ②「育児する父親にやさしい企業」評価システムの導入

国、もしくは自治体が「育児する父親にやさしい企業」評価システムを作成し、その結果および優良企業を公表するようなシステムが求められる。その結果は、様々な場に公表され、少子化や次世代育成に対して大きな貢献をしているということを社会に大きくアピールすることが必要であろう。大学などの就職関係の部署や、子育て支援関係の場に対しても優良企業として紹介されることも有効だと考えられる。

次世代育成支援の推進のための行動プログラム策定の中に、この「育児する父親にやさしい企業」評価システムの導入が含まれることが望まれる。

子育てに主体的にかかわる時間が、社会的に保障されることによって、次にあげるようなプログラムに多くの父親が参加できる条件が成立すると考えられる。

ここでは、ひろばを通して実践可能と考えられるプログラムの提案を行う。今後、この研究は特に継続的に行っていくことが求められる。

## (2) 父子体験プログラム

### 趣旨

男性は女性と比較して、育児や家事にかかわる機会が持ちにくく、主体的なかかわりが持ちにくい実態がある。また、現代の親世代は、育児体験、遊び体験、自然体験、日常的な生活体験が大きく欠如していると言われる。そのため、父親が子育てにかかわるためのきっかけとなるためのプログラムを提供する必要性は非常に大きい。中でも、父と子と一緒に手や体を動かしながら活動する体験型のプログラムは比較的参加がしやすく、そのニーズもある。そのため、様々な種類の父と子の体験プログラムの提供がとても有効であると考え、ここに提案する。

### 目的

父親が子どもと共に体験活動に参加することを通して、子育ての喜びを体験し、子育ての主体者としての意識を育てる。

### 実施方法

#### ①対象

乳幼児とその父親

#### ②日時・回数

土曜日、日曜日の開催。午前中2時間程度が望ましい。父親のみのプログラムの場合、夜の開催も考えられる。できれば、1回限りのイベントとせず、何回かの連続プログラムにすることも望ましい。

#### ③人数

活動内容や場所の広さにもよるが、ひろばで行う場合、10組程度が望ましい。

#### ④募集方法

随時、ひろば等の掲示板やちらしで募集を行う。会の中心となる父親が呼びかけるのも効果的である。

#### ⑤経費

材料等にかかわる実費を払ってもらう。

#### ⑥実施までのプロセス

開催日時の調整が済んだ後は、実施にあたって、子どもと一緒に参加するのか、夫婦で一緒に参加するのか、父親のみなのかを実情や目的に合わせて考える。最初は家族で参加する形態の方が気軽に参加できるという声もある。

#### ⑦活動例

##### ・お父さんと遊ぼう

(親子でふれあい運動遊び・ペーゴマ、剣玉、缶けりなどの昔遊び・わらべうた等)

##### ・男の料理

(簡単離乳食・野外料理・うどん打ち等)

##### ・木工で創作

(子どものおもちゃを作ろう・ひろばの環境整備、日曜大工の日等)

##### ・ケア講座

(ベビーマッサージ・タッチケア・沐浴、入浴体験)

その他、具体的な活動については、様々なスタイルが考えられる。しかし、まずは父親たちにとって楽しめるものであり、物理的な環境や人材などの面から考えて実施可能な内容を考えていけるとよい。

#### ⑧活動の進め方

・受付をすませたあと、父子で名札を付け、他の参加者から名前がわかるようにする。

・イントロダクションとして、父子でできる簡単な手遊びや体操をしたり、父子でコミュニケーションをとり、表情が柔らかくなるようにする。

・活動の手順を説明し、これから楽しそうな活動がはじまることへの期待感を持たせる。

・グループ分けが必要な場合は、簡単な自己紹介し、役割分担ができるように配慮する。

・うまくいかない父子やグループがある場合は、それとなくフォローする。単にやってあげてしまうのではなく、自分でできたという達成感が持てるようなサポートを行う。

- ・父子が一緒にする活動の場合は、子どもが父親のしていることを手伝ったり、父親の取り組む姿に関心が持てるようなサポートを行う。
- ・夫婦で参加している場合など、できるだけ父と子どもが主役になるようなサポートを行う。
- ・活動や片付けなどを通して、父親同士が協力し合ったり、会話が生まれるような工夫を行う。
- ・片付け後に、みんなにちょっとした感想を聞くなどして、思いを共有する。場合によっては、飲食をすることによって、さらに話がはずみ、親しさが増すことも多い。

#### ⑨コーディネーター

コーディネーターは参加者数に応じて、ひろばスタッフが数人。できれば、3～5組の父子に1人のスタッフが入ることが望ましい。ただし、あまりお膳立てし過ぎしまうと、父親同士の主体的なつながりが生まれにくくなることがあるので、注意する必要がある。

#### ⑩フォローアップ

開催後には、後述の「父親サークル活動」のようなものに移行していくことも可能である。しかし、あまり、それを強調せずに自然なかたちで望む必要がある。

#### 留意点

- ・実施側のみで企画を考え進めるのではなく、なるべく日常の中で父親との接点を持ち、意見を反映させていくことが必要である。講師についても、父親の中に優れた力をもつ者もおり、そうした力を発揮してもらうことも大切である。
- ・もっとも大切なことは、父と子のコミュニケーションは図ること、父親が活動を楽しむことである。そのため、父親自身が自分でやり遂げた実感が持てたり、子どもと父親がかかわりあえること、父同士でつながりが生まれることである。そこにスタッフの役割がある。

- ・日常的に職場での地位や肩書きを通してのコミュニケーションが中心となっている父親の場合、あまり社交的ではなく、声を掛けられても話しが続かない場合が多い。ただし、慣れてきて身も心も解放されてくると、次第に饒舌になる人も少なくない。そのため、スタッフが積極的に声をかけ、意識的に他の人とつなげていくようなかかわりが必要となる。
- ・スタッフにも男性が入っていることが望ましい。難しい場合には男性のボランティアが有効となることも多い。
- ・参加者の中で、ひろばにとっても関心を持ってくれた方、様々な特技などを持っている方などには、様々な場面でのひろば活動への参画を呼びかける。声をかけられることによって、協力してくださる方も少なくない。このようなプログラムへの参加をきっかけに様々な地域のつながりに結びつけていくことも大切である。

### (3) 父親サークル活動支援

#### 趣旨

父親は母親と同様にひろばに集い、交流を図ることは困難な状況がある。しかし、何か父親自身が楽しめたり、父子で活動できるプログラムへの参加率は高く、そのニーズもある。ただし、父親の活動の場合、単発のイベント型が一般的であるが、この父親サークルは、父親同士がある目的をもってサークルを形成し、継続的に活動を進めることが大切である。

父親自身が楽しめる活動であると同時に、子連れで参加できる活動であることが望ましい。(母親のリフレッシュの時間にもなる) この交わりを通して、父親のかかわりを深め、子育てネットワークを生み出す契機となる試みとして、この父親サークル活動プログラムを提案する。

#### 目的

父親同士のサークル形成を支援することにより、父親同士のつながり(支え合い)と継続的な活動を生み出し、家族や地域の

中で主体者としての父親役割への意識を高める。

#### 実施方法

##### ①対象

ひろば利用者の夫のみならず、地域の子育て家庭に呼びかける。あまり対象を限定しすぎず、夫婦の参加も可能にするような呼びかけの方が望ましい。また、最初からサークル活動の呼びかけをするのではなく、親子バーベキュー大会や、親子で遊ぶ企画など、誰でも参加しやすい企画からはじめるとよい。ただし、この企画の中核となる父親コアスタッフを置くことによって、後のつながりを生み出しやすい。

##### ②日時・回数

最初は、家族参加のお楽しみ企画であるため、季節ごとのイベントからはいめるとよい。その家族イベントから次第に父親サークルの芽が生まれたら、サークルとしての活動予定を作っていく。

もちろん、日時はサークルメンバーで決めればよいが、土日の月1回程度の活動が無理がないものと考えられる。ひろばが空いている時間帯を活用するのもよい。

##### ③募集方法

子育てひろばを通して、広く募集する。ひろばスタッフの夫や、中核となる父親コアメンバーの直接的な呼びかけなど、知り合いからの声かけが最も効果的である。

##### ④活動例

活動内容は何か1つにしぼって行うケースと、多様な活動を行うケースが考えられる。活動例としては、次のようなものが考えられる。

- ・子ども向けのお父さん劇団
- ・子ども向けのお父さんバンド
- ・絵本の読み聞かせ
- ・お父さんクッキング
- ・父と子の自然探索クラブ

その他、様々な活動が考えられるが、これらの内容の基本は父親自身が楽しみ、子

連れで楽しめるものが望ましい。

##### ⑤コーディネート

この父親サークル活動を支援するひろば担当者は、活動がうまく行われるよう側面的な支援を行う。具体的には活動の場の提供、サークル活動参加者募集の手伝い、活動の活性化の相談、他のサークルや関係機関との連携やイベント参加のコーディネート等がある。基本的にはサークルメンバーの自主的な運営が基本ではあるが、サークルが維持され、ひろばや地域、他の団体などとのつながりが生まれるような支援を必要とする。

##### 留意点

この活動を通して、父親自身が楽しみ、父親同士の交流の深まりが生まれることが大切である。また、父親だけが楽しむのみならず、子連れ参加原則で行うことにより、子どもにとっても楽しい時間が過ごせる工夫も必要となる。父親同士、父子の交わりを通して、父親が子育てを積極的に行うことの喜びを感じたり、父親としての役割意識を高めることが最も大切である。

さらに、この活動を地域の親子に発表するようなイベントを行うことによって、地域交流の活動にもなりうる。

この活動を行うことが、父親にとってだけでなく、子どもにとって、母親にとって、共に充実した時間となるよう留意する必要がある。子どもが退屈なだけの苦痛の時間を強いられたり、母親が子どもを見ている時間になるなど、父親の楽しみの犠牲にならないような工夫も求められる。

#### (4) 父親の育児座談会

##### 趣旨

父親も母親と同様、育児に関わることで、喜びを感じると同時に悩みも生じる。そこで、父親も気軽に育児のことについて話し合い、他の人の意見や実際の子育ての姿を知ることによって、相互の学びあいを行うことが必要である。父親は子育てのことについて意識的に話す機会が少ないため、このような場を提供することの意味は大きいと考える。

##### 目的

父親同士が育児の座談会を行うことを通して、他の父親の育児の仕方や考え方を知ると共に、自分の育児を振り返り、その見方、考え方を広げ、父親としての意識を高める。

##### 実施方法

###### ①対象

ひろく地域の家庭に呼びかけることも必要だが、現実的にはひろばに集まってきている親子が対象となる。父親が参加している場合には声をかけ、また母親から声をかけてもらう。子どもの年齢はあまり限定しなくともよいが、主に0歳から2歳くらいまでの乳児が中心となる。また「0歳の子どもをもつ父親」など、子どもの年齢を限定した対象の持ち方もある。

###### ②日時・回数

父親プログラムに共通のことだが、平日開催は難しいので、土曜、日曜か夜間の開催が望ましい。できれば、1回限りではなく、3回くらいの連続的な座談会を設定できることが望ましい。ただし、あまり負担に感じてしまてはいけないので、最初から連続とせず、1回目を開催した様子から2回目を設定するのもよい。参加者がもう少し話したいような雰囲気になることが重要である。

###### ③参加者数

話し合いの人数は、あまり多くなりすぎても話ができず、少なすぎても話が行き詰ってしまう。5人から10人程度を目安として参加を募る。

妻や子どもも一緒に参加するような形態にするか、父親だけにするかは、参加者や場の実態やその回の目的に応じて検討する。

###### ④テーマ

はじめからテーマを設けてもよいが、講義形式ではなく、参加者による話し合いのプログラムであるということは確認しておきたい。テーマを設ける場合、次のような例が考えられる。

- ・父親の子育て
- ・子どもとのつきあい方
- ・子育ての悩みと喜び
- ・男の子、女の子
- ・わが子紹介
- ・絵本
- ・ほめ方、しかり方 等々

###### ⑤活動の進め方

- ・受付をすませたら、まずは名札を付け、他の参加者に名前がわかるようにする。
- ・父と子どもと一緒に座談会に参加する場合は、簡単な手遊びや赤ちゃん体操などを行い、なごやかな雰囲気を作る。父子が同室の場合、ある程度、話し合いにじっくり取り組めるよう、部屋に保育者を何人か配置することが望ましい。子どもがいない場合に子どもの遊びをして表情を和らげるのもよい。
- ・自己紹介を行い、どのような参加者がいるかを互いに知る。子どもの年齢や名前の由来などについて話したりする。
- ・続いて、自分の子育てについての関わりや思いを話してもらうことがよい。父親の場合、その話の切り口がなかなかつかめないときも多く、ファシリテーターは具体的な話題を振ったりしながら（「こんなことって、ありませんか？」等）、和やかな会話が進むよう配慮する。
- ・話の論点が少し見えてきたら、「他の方は

どのようにされていますか？」など参加者それぞれの育児のやり方や考え方が出されるように投げかける。

- ・最後に、どのような意見が出されたかをファシリテーターは簡単に要約を行い、振り返る。ここでは、結論を出すことが目的ではない。
- ・参加した感想を簡単に書いてもらうなどして、今回の評価を行い、次の開催のあり方についての参考とする。
- ・連続で話し合いが出来る場合には、テーマを設けたり、ゲストを迎えたりといったこともいくつか考えられる。また、今回、共有された話題や課題となった話があった場合には、「また次回、その話の続きをしましょう」などと次回につなげることも考えられる。
- ・少しラフに行いたい場合は、食事をしながら行ったり、あるいはアルコール類も含めて行うことも可能である。

#### 配慮点

- ・参加する際には、妻に背中を押されたり仕方なくといった姿が多いのも事実であるが、まずは責めない姿勢が求められる。父親自身も「あまり子育てには関わっていない」といった自覚がある人も多く、「指導されるのであるならば嫌だ」といった意見も聞く。参加したがる人への配慮も必要で、妻としては誘ってみたがそっけない返事で、まったく関心がないといった場合も多々ある。そうした時も夫婦参加のプログラムや子どもと一緒にプログラムなど新たに多様な選択肢がもてるような配慮をしていきたい。
- ・参加にあたっては、女性から参加したいという要望がある場合もあるが、話しあいのメンバーとしては男性に限ったほうが話しやすいという意見もある。そうしたことは直接参加のメンバーに投げかけて聞いてみることもよい、話しあいのひろがりとなる場合がある。
- ・参加者の中で、子育てにかなり積極的にかかわっている方と、そうではない方の

- 差は非常に大きい。ファシリテーターは積極的な方にとっても、そうではない方にとっても参加してよかったと思えるような進め方が必要となる。特に、あまり積極的ではない方には、そのなかなかかかわれない実情を受け止めたりすることも大切である。そうすることで、劣等感を感じずに他の方の子育てへのかかわり方を自分なりに受け止められ、「やってみよう」という思いにもなる。
- ・ファシリテーターについては、男性でも女性でもかまわないと思われるが、他の話しあいプログラムと同様に、責めない姿勢や背景の理解などとあわせて、父親たちの具体的なかかわりについて話題提供ができたり、共感ができる人材が望ましい。
  - ・この座談会への出席を通して、父親同士のつながりが生まれるような配慮もとても重要となる。
  - ・このような座談会を通して、父親サークルやネットワーク化していくことも視野に入れてひろばスタッフはかかわりたい。



## 6) 学生の子育て支援プログラム

### (1) 学生ボランティア

#### 目的

現代は、少子化、核家族化、地域コミュニティの弱体化等によって、中高生や大学生などの学生世代が乳児とかかわるような機会が失われている。そのことが、若者の内面的な人間形成や次世代の子育て者としての成長に影響を与えている面も少なくない。

また、親子にとっても学生とかかわることの意味は非常に大きい。まだ子育て未経験の学生ではあるが、子どもに純粋に向き合ったり、体を使って遊ぼうとする姿勢は子どもにとってもうれしい存在であり、親にとってもありがたい存在である。親世代と学生世代がかかわる場もないため、そのような世代間交流の意味もある。

学生がボランティアとしてひろばに入ることは、学生の成長のみならず、子どもにとっても、親にとっても大きな意味がある。ただし、本当に意味のあるものにするためには、工夫を要する。

#### 実施方法

##### ①対象

中学生、高校生、短大・大学生、専門学校生など。小学生も考えられる。

##### ②募集

行政機関や学校など様々な場に広報する。つながりのある学校の教員を通して募集を行うとよい。また、自治体やボランティア協会、市民活動支援センター等の広報媒体を用いるのも効果的である。

##### ③日時・回数

学生の夏休みや冬休みなどの長期休暇を利用したボランティア募集が集まりやすい。できれば長期休暇のみならず、普通の日のボランティア募集も行う。特に大学生など時間に都合がつけやすい場合、

定期的、あるいは時間があるときに来たいという学生もいるので、休み期間にボランティアに来た学生に募集をするとよい。継続的に学生ボランティアを行うことによって、親子にも慣れ親しんだ存在となり、学生自身も学校とはまた別の居場所ともなり、その意味は大きい。

#### ④活動内容

- ・ 子どもにかかわって遊ぶことが中心となる。赤ちゃんを抱っこするなど、子どもとたくさん触れ合う。
- ・ 共同作業などの場を通して、親やスタッフとの会話やかかわりが行えるようにする。
- ・ 学生ボランティアの存在を生かし、手がないと日常的には行えないような外遊び企画、体を使った遊び等を行う。
- ・ ひろばでのイベントでの裏方などの作業も手伝ってもらう。継続的に入っている学生の場合、学生の特技などを生かしたり、学生企画を行うこともよい。
- ・ ひろばに半日、あるいは一日入ってもらった際には、簡単でも記録（感想）を書いていってもらおう。
- ・ ひろば担当者は、学生がいつ、どれくらいの時間ボランティアとして入っていたか、その様子はどうだったかを記録しておく。

#### ⑤コーディネート

ひろばのボランティアに入って、学生も親子も共に楽しかったと思えるような、ひろば担当スタッフのコーディネートが非常に重要である。このコーディネート次第で、学生が継続的にかかわるようになるか否かがわかれることも少なくない。

特にひろばの場合、保育園などと違い、親子が一緒にいるため、子どもにかかわりにくいという学生の声がある。そのため、子どもに十分にかかわれたり、赤ち

やんをだっこする機会が得られるように意図的につなぐようなはたらきかけが必要となる。また、子どもとかかわっているように見えても、うまくかかわれなかった、泣かれてしまったという経験は学生にとって大きなショックとなることがある。そのような学生の思いをつかみ、必要なはたらきかけをしていくことが求められる。

また、学生自身がひろばで役に立っていると感じられることが重要である。そのため、学生がやってくれたことに対して、その役割の大きさや感謝を伝えていくことも不可欠である。学生の特技などを生かせる場などがあると、学生にとっても大きな喜びとなる。

継続的にかかわる学生が出てきた場合、学生たちのアイデアを生かしたイベントやプログラムを実施することも考えられる。学生の主体性が発揮できるような工夫、学生たちのネットワークが生まれるような工夫も必要となる。

#### ⑥研修

ボランティアで入る学生は研修を受けることを原則とする。夏休みなどの長期休暇などの場合は一斉に研修を行う。それ以外での希望者は、随時、必要な留意すべき内容について説明を行う。

研修内容としては、以下のようなプログラムが考えられる。

- ・ 自己紹介と交流会
- ・ 乳幼児の理解と具体的なかかわり
- ・ ひろばの実際と学生ボランティアの役割と留意事項（安全や保険）
- ・ 反省会

#### ⑦フォローアップ

学生がボランティアに入る中で、どのように感じていたか、その本音が聞けるような工夫を行う。その中で、学生が困難さを感じているようなことがあれば、対応を行う。また、今後、継続的につながっていこうという気持ちのある学生には今後の希望についても話を聞く。学生

のネットワークを形成することも視野に入れる。

#### 留意点

- ・ 学生の自発性、主体性が尊重される中で、継続的で体験的なかかわりができるよう配慮する。そのためには、ひろば担当コーディネーターが学生の希望や感想を聞き、主体的に参加できるような方法を模索する必要がある。
- ・ 子どもや親と学生が十分にかかわれ、信頼が得られるようにするため、コーディネーターはアドバイスをしたり、間をつないだりする。
- ・ 学生、親子双方に意味があるような互恵的な関係を形成するとともに、学生の名前や存在がある程度、スタッフや利用者に見えるような工夫を行う。
- ・ 学生にとってひろばが居場所となり、主体的にかかわれるようにするために、学生同士の交流が生まれるような工夫をすることや、学生たちのアイデアが生かせるような工夫も行う。
- ・ ボランティアの学生がかかわる中での事故やトラブルが起こった際の保険に加入する。また、そのような保険に入っていることを学生にも事前説明しておく。

## (2) 学生の子育て家庭参加プログラム

### 趣旨・目的

現代の若い親世代が出産前に赤ちゃんを抱っこしたり、小さな子どもと遊ぶことや世話をしたりする経験が少ないことが報告されている。次世代の子育てを担う学生が、青少年時代から小さな子どもと遊んだり、世話をしたりする経験が親性を育むことは非常に重要なことである。現代では、そのような意図的な社会的仕組みが必要となっている。ここであげる子育て家庭に訪問するプログラムでは、ひろばでのボランティアよりもさらに一步踏み込んだものとなる。学生が子育て家庭に入り込むことになるため、単に子どもとかわかることのみならず、家庭での日常生活を体験することにより、小さな子どものいる家庭そのものを知る場となる。家庭側にとっても、親子だけの家庭に異世代が入ることになり、以前よりも開かれた家庭の経験をするようになる。もちろん、現代社会においては簡単なことではない。そのため、子育てひろばがコーディネートを行い、担当スタッフは学生、受け入れ家庭双方が満足できるような交流が図れるよう調整を行うことが必要となる。

### 実施方法

#### ①対象

子育てひろばにおいて、5日以上ボランティア体験をしている中学生以上の学生。受け入れ家庭は、子育てひろばの利用者で、プログラムの趣旨に賛同する3歳未満の子どもがいる家庭。(できれば、学生が子どもに十分にかかわれる体験とするためには、子どもが2人以上いる家庭が望ましい。)

#### ②期間・日時

5日以上、1日3時間～5時間を目安とする。基本的には、1家庭に学生2人がペアを組んで行う。学生の経験や受け入れ家庭の状況によっては学生1人でも

可能。夏休みや冬休みなど、学生の長期休暇の時期に定期的に行うことが望ましい。具体的な日時等は、子育てひろばスタッフが中に入り、学生と受け入れ家庭で話し合い、調整して行う。

#### ③活動内容

学生は、決められた日時において、受け入れ家庭に入り、子どもと一緒に遊んだり、子どもの世話をを行う。子どもとかかわることが中心となる。また、必要に応じて、食事の準備などの家事の手伝いを行う。

日常的なかかわりが中心とはなるが、学生自身が具体的にやってみたい要望、あるいは受け入れ家庭がぜひやってほしいと考えていることは、事前にしっかり打ち合わせを行い、互いが納得した計画立案を行うようにする。例えば、公園に行って遊ぶ、庭にビニールプールを出して遊ぶ、一緒に近くで買い物に行く等のプランが考えられる。

また、ちょっとした「託児」(30分～1時間程度)も可能である。ただし、これは学生と家庭相互の十分な理解とコーディネーターの十分な配慮の上で行うことが必要である。今後、このプログラムの発展形として、このような学生のベビーシッターが想定できるが、そのシステム作り(研修、認定資格、マニュアル作成、保険、バックアップ体制、責任体制などのルール作り等)が不可欠となる。

学生、受け入れ家庭共に一日ごとに記録を行うとともに、双方からそれぞれにコーディネーターへの簡単な報告を義務付ける。

#### ④必要経費

基本的にはボランティアと考える。ただし、学生および受け入れ家庭の交通費や食事代、その他最低限の必要経費については支払われるものとする。

#### ⑤募集方法

子育てひろば内で受け入れ家庭の呼びかけを行う。原則的には、日常的に学生世代と出会う経験のあるひろば利用家庭であることが望ましい。また、ひろばの利用の有無にかかわらず、このプログラムに対する十分な理解のある家庭であることが必須条件となる。

学生に関しては、近隣の学校に募集を行う。ただし、日頃からひろばにボランティアに来ている学生がいる場合は、その学生に第一に声をかけるのが望ましい。できれば、ひろばで親子にかかわる経験のある学生が望ましいが、経験が無い場合は、通常の学生ボランティアを進めるか、数回のひろば経験をした後に参加するようにする。あまりたくさんの募集をしてしまうと、十分な配慮ができなくなるため、注意する必要がある。

#### ⑥コーディネート

コーディネートは子育てひろばの担当スタッフが行う。基本的には学生数と家庭数を定め、募集を行う。希望者には、まずこの趣旨および具体的な内容等について説明を行う。

その後、学生および受け入れ家庭の希望や個性に合わせて、学生のペア（2人組）および学生と受け入れ家庭のマッチング（組み合わせ）を行う。これらのマッチングがうまくいくよう間をつなぐことが必要である。このペアを作る場合、大学生から中学生までの年齢差があるような場合は、少し離れた年齢同士をペアにするのも一案である。そうすることで、上の年齢の学生が下の子がうまく動けるように配慮する経験もできる。できれば、このペアは友達同士ではなく、新しい出会いの場とすることも有意義である。ただし、その場合、事前に親しくなるためのオリエンテーションの工夫が必要となる。

また、研修を企画し、そこでは学生および受け入れ家庭がプログラムの内容をしっかり踏まえると同時に、派遣当日が

楽しみになるよう配慮する。学生と受け入れ家庭の打ち合わせの時には、簡単なお楽しみ企画を入れることも互いの緊張感がとれ、コミュニケーションを図る上で有効である。

学生のニーズや個性、性別、受け入れ家庭の子どもの人数や年齢、兄弟構成、父親のかかわりの多い少ない等を十分に把握した上でのマッチングが必要となる。このマッチングがプログラムの成否を握る部分もあるので、互いの情報収集および、それをもとにどのような組み合わせを行ったらいいかを十分に検討する必要がある。

#### ⑦研修

学生がこのプログラムに参加するためには、以下の研修プログラムを行うことが条件となる。

##### ○乳幼児の理解（60分）

乳幼児期の発達、理解の仕方等について、具体的な子どものエピソードを通して学習する。

##### ○乳幼児へのかかわり（60分）

乳幼児にどのようにかかわったらよいかについて、実際の遊び、困った行為への対応の仕方、お世話の仕方、安全への配慮等について、具体的なエピソードを通して学習する。

##### ○ケーススタディ（60分）

以上の2回の研修を踏まえ、実際に自分が子育てひろばのボランティアを行い、その具体的なケースから自分が気付いたこと、困ったことを発表し、どのようにかかわったらよいかをみんなで考える。

##### ○受け入れ家庭との打ち合わせ会第1回（60分）

受け入れ家庭との対面を行い、学生、受け入れ家庭の自己紹介および、お互いの今回のプログラムへの思いと実施日時等について意見交換を行う。

##### ○受け入れ家庭との打ち合わせ会第2回（60分）

第1回の意見交換会を踏まえ、具体的な計画を作成する。